《調査報告》

浄楽寺第 12 号古墳の測量調査報告

－三次地方史研究会・芸備友の会・広島県立歴史民俗資料館の合同調査－

加　藤　光　臣　・　脇　坂　光　彦

１　はじめに
２　昭和 29 年の発掘調査
３　測量調査からみた現状と特色
４　成果と課題

【要約】

広島県立みよし風土記の丘の史跡「浄楽寺・七ツ塚古墳群」では、これまで古墳群全体の空中写真による測量図と特徴的な古墳 10 基の個別の墳丘測量図が作成・報告されている。しかし、昭和 29 年の発掘調査でその内容がある程度明らかにされている浄楽寺第 12 号古墳は、県内でも最大規模級の円墳にもかかわらず、これまで詳細な墳丘測量図は作成されていなかった。それゆえ、今回当該古墳の墳丘測量を行いその調査成果を報告することによって改めて当該古墳を再評価する資料を提供するものである。

１　はじめに

「浄楽寺古墳群・七ツ塚古墳群」は、三次市高杉町から小田幸町地区にかけての標高 193 ～ 245 mの丘陵上に総計 176 基が群集して分布する三次盆地で最大規模の古墳群である。それゆえ、昭和 47（1972）年に国史跡の指定を受け、昭和 54（1979）年には県立「みよし風土記の丘」として史跡公園化されて保護・公開されてきた。

平成元（1989）年には、広島県立歴史民俗資料館による風土記の丘整備事業として古墳群全体の空中写真測量図（縮尺 1/500 及び 1/1,000 図）の作成が行われるとともに、広島県立歴史民俗資料館の展示模型作成のために浄楽寺第１号古墳（帆立貝形古墳：全長 29.9 m）、浄楽寺第 61 号古墳（方墳：一辺 19 m）、七ツ塚第９号古墳（前方後円墳：全長 29.5 m）、七ツ塚第 15 号古墳（円墳：径 28.5 m）など４基の古墳の詳細な平板測量図も作成された。また、測量や分布調査等によって新たに確認された古墳を含めて古墳群全体の古墳号数名の整理も行われ、浄楽寺古墳群の総数は 116 基、七ツ塚古墳群の総数は 60 基と現状把握された（植田 2003）。

その後、資料館では県内高等学校の歴史系クラブの活動と交流の活溌化をめざして「高校生による考古学サマーセミナー」が開催され、平成３（1991）年以降には高校生たちの合同学習の一環として、風土記の丘内の古墳の平板測量実習が資料館学芸員の指導のもと行われてきた。その結果、浄楽寺第 37 号古墳（円墳：径 29.5 m）、七ツ塚第 10 号古墳（帆立貝形古墳：全長 25.5 m）、七ツ塚第 11 号古墳（帆立貝形古墳：全長 28.5 m）、七ツ塚第 14 号古墳（円墳：径 18.5 m）、七ツ塚第 24 号古墳（円墳：径 25 m）、七ツ塚第 26 号古墳（円墳：径 20.5 m）など特徴的な古

墳６基の墳丘測量図が作成・報告（縮尺 1/200 ～ 1/300）されるという成果をあげてきた（植田 2005）。

しかしながら、三次盆地では最大規模で広島県内でも有数の大規模円墳といえる浄楽寺第 12 号古墳については 50 ㎝の等高線による空中写真測量図があるものの、これまで詳細な墳丘測量図は作成されていなかった。ゆえに、三次地方史研究会を中心として、芸備友の会、広島県立歴史民俗資料館の関係者の合同で、浄楽寺第 12 号古墳の墳丘測量調査を実施することとした。

測量調査は、令和２（2020）年３月初旬に広島県立歴史民俗資料館学芸員（当時）の村田晋・稲村由香らが当該古墳の墳丘を中心に南北と東西方向の十字ラインを基軸線とした開放トラバースによる測量杭の設定を行った後、天候と調査参加者との調整を図りながら３月７・12・20・21 日の計４日間にわたり 25 ㎝等高線による墳丘の平板測量（縮尺１:100）を実施した。平板測量調査への参加者は、三次地方史研究会の大岡廉・加藤光臣・中村芳昭・新見理恵・新見裕樹（当時島根大学生）と芸備友の会の脇坂光彦である。

なお、現状古墳の空中写真（ドローン使用）の撮影については前川俊清氏（現在三次地方史研究会員）の懇切なる協力を得た。また、測量調査計画の打ち合わせ当初から調査終了時まで田邊英男資料館館長並びに村田学芸員からは、様々な配慮と全般的支援を受けた。小都隆氏には過去の古墳群の調査・保存に関する貴重なアドバイスをいただいた。記して篤くお礼申し上げます。

２　昭和 29 年の発掘調査

昭和 29（1954）年、広島県教育委員会と広島大学考古学教室（のちの考古学研究室）を中心とする調査団方式によって、三次盆地で初めて古墳の本格的な学術的発掘調査が行われたのが「常楽寺古墳群（のち「浄楽寺古墳群」と改称）[1]」であり、三次盆地における科学的な古墳研究の幕開けともいえる記念碑的な発掘調査であった。

日本考古学協会編 1963『日本考古学年報６　昭和 38 年度』６の潮見浩氏の報告文「広島県三次市常楽寺古墳群」によると、昭和 29 年３月 26 日～４月４日にかけての調査であり、広島県教育委員会を調査主体として小倉豊文・松崎寿和・村上正名・木下忠・潮見浩・藤田等・本村豪章・服部宣昭ら各氏の調査者名が記され（ほかに、当時の県立塩町高等学校教師であった藤村耕市氏も参加）、当時確認されていた 45 基の古墳群のうち５基の発掘調査が行われ、その概略的内容が記されている[2]。奇しくも昭和 28 ～ 29 年には、京都府椿井大塚山古墳や岡山県月の輪古墳及び金蔵山古墳など著名な古墳の発掘調査が実施されており、特に昭和 28（1953）年の月の輪古墳の調査は住民参加の発掘方式で行われ、第二次大戦後の国民の民主主義的思潮の高まりを象徴する調査でもあった。「常楽寺古墳群」の調査も当時の自由で民主的な考古学研究の動向を強く反映したものであったと思われ、翌年の昭和 30（1955）年には三次市粟屋町の地域住民たちの要望と支援のもと、広島大学と三次尚史会[3]合同の調査団によって「岩脇古墳」の発掘調査も行われることとなるのである（加藤 2018）。

「常楽寺古墳群」の調査内容の詳細は、松崎寿和・潮見浩 1954「広島県三次市神杉常楽寺古墳群調査概報」『広島大学文学部紀要』６で報告されている[4]（以後「調査概報」と略称する）。「調査概報」には当時の調査内容が詳しく記されるとともに調査古墳の要点をまとめた一覧表も掲載

されている。したがって、ここではこの表を整理したもの（植田 2003）を含め、改めて一部改変して掲示しておく（第１表。「調査概報」の文章内容に基づき、表内の誤記と思われる数値については一部補足修正した）。

また、浄楽寺第 12 号古墳（常楽寺１号墳）の調査で把握された特色に関しては、「調査概報」が現在知りうる貴重な情報源であることから、記された内容を一部表現を変えて、調査当時の１ｍ等高線の墳丘図（第１図）とともに以下に示しておく。

①墳丘径は東西径 42 ｍ、南北径 45 ｍ、墳頂部の平坦部径 10 ｍ、高さ６ｍで古墳群中最大規模である。

②墳丘の西方墳丘斜面は幾分削られて葺石が散乱するものの、全体としては本来の形状をほぼ保っている。

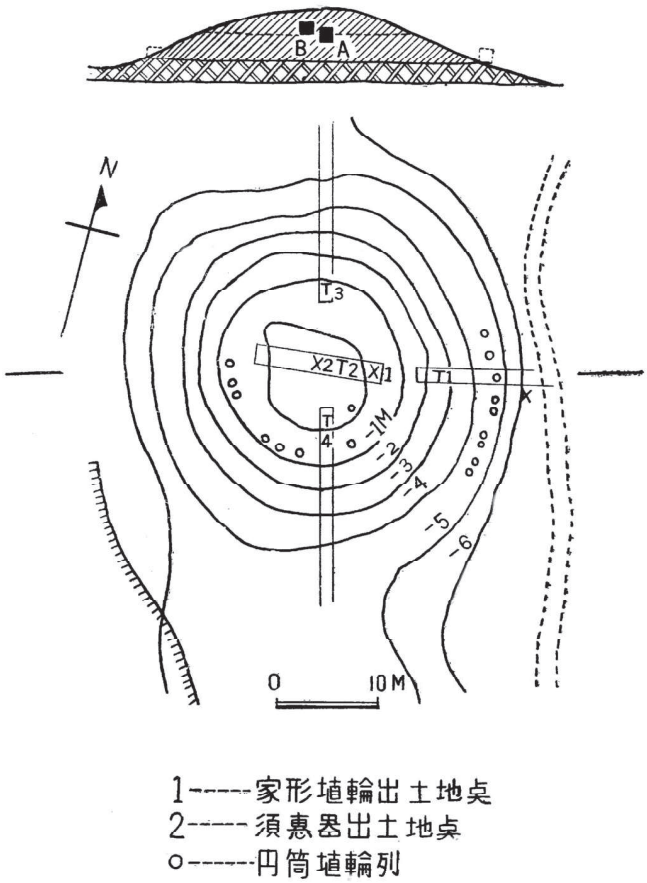
③墳丘は基底部から高さ約 1.5 ｍまで約 30 度の傾斜であり、この部分には葺石は認められない。その上部には幅 2.5 ～ 2.6 ｍの緩やかなテラス面をもつ段（段築）が存在する。

④段（段築）の縁辺部から 50 ㎝内側のテラス面に底部径 44 ㎝、厚さ２㎝の円筒埴輪が約１ｍの間隔で廻らされている。

⑤段築から上方の墳頂部縁辺に至る約 16 度の墳丘斜面にはぎっしりと葺石が敷き詰められており（写真１）、葺石の基部には基底石として大きな石が使用されている。墳頂部縁辺のやや傾斜した部分にも円筒埴輪列が存在する。

第１表　昭和 29 年に調査された古墳群の特色一覧（一部修正）

調査当時の常楽寺古墳名		１号墳	２号墳	３号墳	４号墳	５号墳
外部施設	墳丘高	６ｍ	２ｍ	2.5 ｍ	1.5 ｍ	３ｍ
	墳丘直径・墳丘長	42(×45) ｍ	25 ｍ	14 ｍ	10 ｍ	25 ｍ
	葺石	○	○			○
	円筒埴輪	○				？
	形象埴輪	○				
内部主体	主体構造	Ａ：粘土槨 Ｂ：粘土槨	組合石棺	組合石棺	組合石棺	組合石棺
	粘土	○	○	○	○	？
	朱	○	○	○	○	○
	床の構造	Ａ：礫 Ｂ：一部礫粘土？	礫	礫	粘土	礫？
	副葬品	Ａ：鉄鏃２・短甲片１・鉄刀子２・鉄鉇１ Ｂ：ガラス小玉 100・勾玉２		鉄剣１・鉄鏃１・鉄片１		須恵器・土師器破片
	人骨			大腿骨左右 頸骨左右	頭蓋骨１ 歯牙２	
	保存状態	Ａ：破損 Ｂ：完存	完存？	完存	完存	破損
改訂後現在の浄楽寺古墳名		第 12 号古墳	第 37 号古墳	第 61 号古墳	第 63 号古墳	第１号古墳
現状	墳丘形	円墳	円墳	方墳	円墳	帆立貝形墳
	墳丘高	6.1 ｍ	4.3 ｍ	2.7 ｍ	1.9 ｍ	円丘高３ｍ
	墳丘径・墳丘長	45.8 ｍ	29.5 ｍ	19 × 19 ｍ	13 ｍ	墳丘長 27.9 ｍ 円丘径 23.5 ｍ
	備考	二段築成	二段築成			二段築成



第１図　調査当時の浄楽寺第 12 号古墳（常楽寺１号墳）

⑥墳丘の築成法は、まず墳丘基底部から段までは地山を利用（地山の削り出し成形？）し、段から墳頂まで封土（盛土）を幾層にも重ねて構築し、葺石はこの封土の土留めとしている。

⑦墳頂部で東西方向に設定したトレンチＴ２の東端深さ 10 ㎝の場所で家形埴輪の断片が出土。また、同トレンチの中央部では表土下１ｍの深さにかけて格子目をもつ須恵器片が出土したが、須恵器片は盗掘の際に混入したものであることが確かである〔※ただし、その具体的根拠は記述されていない〕。

⑧埋葬施設である内部主体は、墳頂平坦部中央で東西方向に向けて存在するＡ主体とその南側に平行して存在するＢ主体の２基があり、Ｂ主体はＡ主体に比べてやや地表面に近い位置にある。

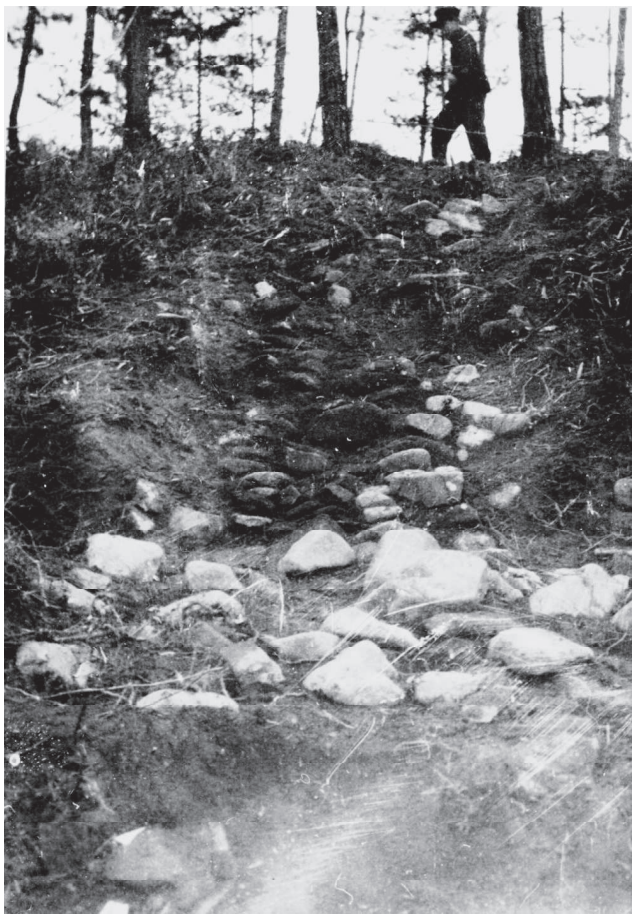


写真１　トレンチ内葺石の状況（藤村耕市氏撮影）

⑨Ａ主体は盗掘で破壊を受けており全体の形状は不明であるが、幅 60 ㎝、長さ 4.2 ｍの規模の粘土槨である。槨内床面には 20 ㎝の厚さで礫が敷き詰められており、表土下 1.7 ｍの位置にある。礫床面から平根式鉄鏃２、刀子２、鉄片３が出土している。平根式鉄鏃はともに長さ 3.5 ㎝の有茎で刃部をやや内湾させた小型品である。刀子は長さ 6.2 ㎝の小型品であるが、身の幅が長さに比べて広い点が注目される。他の１点は身の部分の破片であり同様な形状であったと考えられる。鉄片のうち１点は短甲の破片であろうか。他の２点は鑿（鉈？）の先か尖根式鉄鏃の断片と考えられる。

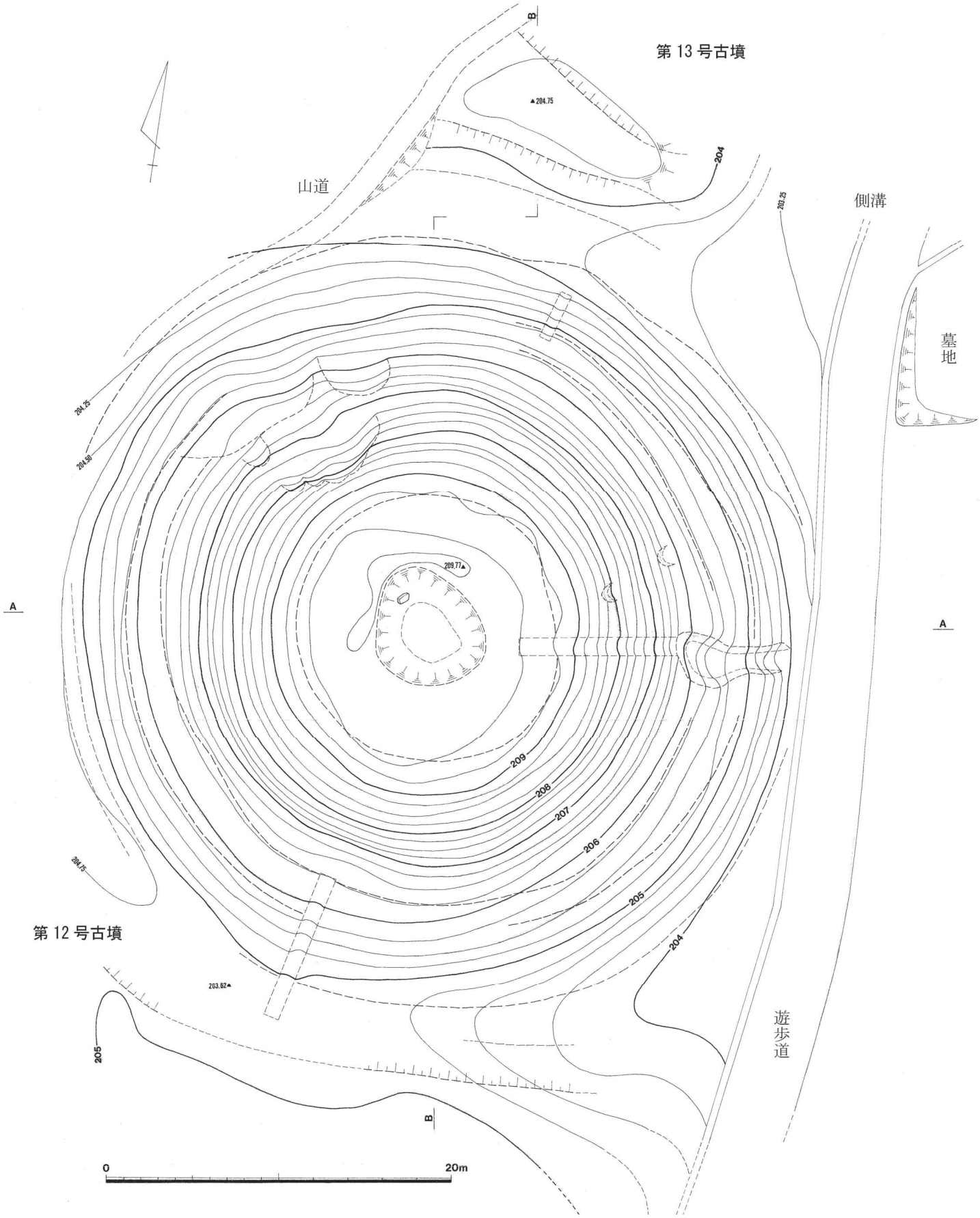
⑩Ｂ主体はＡ主体と 80 ㎝の間隔をおきほぼ平行して存在している。表土下 1.2 ｍの位置に粘土槨の上面があり、形状は幅約１ｍ、長さ約３ｍのナマコ状の不整形を呈している。粘土槨の内部は幅 40 ㎝、長さ 2.4 ｍの長方形をなし、もとの槨の上蓋部をなしていたと考えられる粘土層を含む黄褐色土層が充満していた。副葬品としては、中央部よりやや東寄りの深さ 2.5 ～ 35 ㎝の間で直径４㎜の紫色のガラス小玉約 100 個が出土した。また、深さ 40 ㎝の箇所から長さ約３㎝の濃いアメ色のメノウ製勾玉２個が出土した。なお、粘土槨内は深さ 40 ㎝前後まで黄褐色土層が続き一部礫が存在したが、その下部はＡ主体の礫下と同様な黒色土層をなしていた。この黒色土層は墳丘の断面観察によると、深さ２ｍ以下に層をなしている封土（盛土）と考えられることから、内部主体は黒色土層の上部までと考えられる。このような内部主体の状況から推察すると、木棺を中に置いて、棺の上部から側面部に粘土を施したと考えられる。しかし、木棺の遺存はなかった。

３　測量調査からみた現状と特色

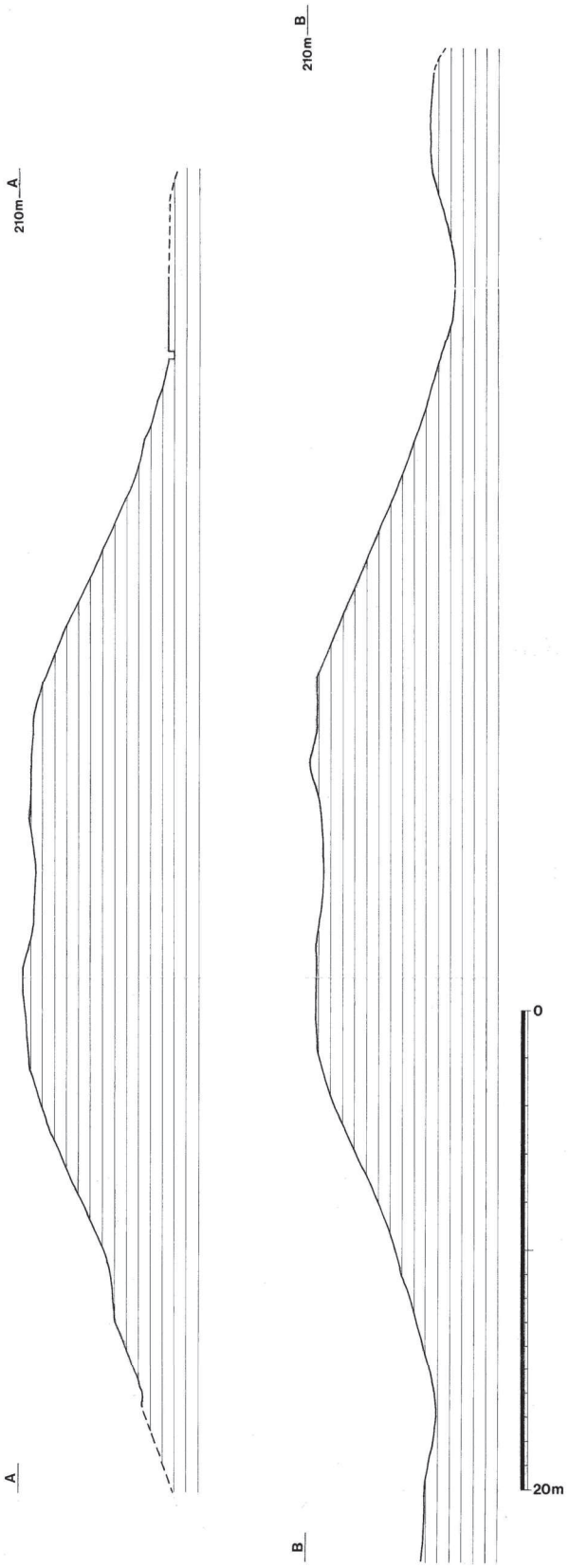
浄楽寺古墳群は美波羅川に沿うような状態で南から北方向へ延びる丘陵帯の最も北寄りの尾根上に存在する。この丘陵尾根は馬洗川と美波羅川の合流地域に形成された広い沖積低地帯側に向けて突き出しており、尾根上からは三次盆地では最大規模の高杉地区の水田低地帯を眺望することができる。丘陵尾根の先端寄りは小さな谷を挟んで二股状の舌状尾根に分岐しており、双方の尾根上に尾根先端部から尾根最高所まで円墳群が列状に並んで築かれている（第２図）。浄楽寺第12号古墳が位置する場所は、西側尾根の先端から約250ｍ付近で南北方向の尾根軸が緩やかに南々東方向へ屈曲し尾根頂部の幅がやや広めとなる尾根軸変換点であり、約20ｍ南側の標高約207ｍの尾根最高所に向けて漸移的に平坦状となる地形変換点に当たる場所でもある。その場所は標高204～205ｍで、西側には丘陵尾根に沿って沖積低地帯から南奥の岩倉池付近まで続く幅約20ｍで長さ約１㎞余りの谷が入り込んでおり、谷には岩倉池を源流とした溝状の小河川である岩倉川が北方の馬洗川に向けて流れている。第12号古墳の墳端と西側直下の岩倉川沿いの谷水田地との比高差は24～25ｍである。現在墳丘西側の丘陵斜面の樹木が伐採されているため、谷水田地からは第12号古墳の圧倒されるような大きな墳丘を見上げることができる。尾根の北側先端寄りは樹木で覆われているため現状では北側から第12号古墳の墳丘を望むことはできないが、もし古墳築造当時に北側前面の樹木伐採が行われていたならば、その立地や規模からみて本来は北側の沖積低地帯のかなり広い範囲から墳丘を視認できたものと思われる。

写真２　浄楽寺第12号古墳上空から北方向の沖積低地帯を望む

第２図　浄楽寺古墳群空中写真測量図（部分）



第３図　浄楽寺第12号古墳地形測量図（1/300）



第４図　浄楽寺第 12 号古墳墳丘断面図（1/300）

さて平成 15（2003）年の測量調査報告では、第 12 号古墳の墳丘規模は径 45.8 m、高さ 6.1 mとされている。

今回の墳丘の測量調査では、第 12 号古墳は丘陵尾根頂部を造成して尾根幅いっぱいに墳丘を築いており、標高 204 mの等高線付近がほぼ墳丘基底部の墳端線となるようであり、現状の墳端線から尾根軸方向の南北墳丘径は 44.5 mの規模になると把握した（第３・４図）。ただ、尾根軸に直交する東西径については東側がちょうど遊歩道の側溝に接する部分と考えられるものの、墳丘の西側は丘陵の斜面変換線付近に当たり、しかも墳端域を廻るように造られた山道による攪乱も受けていることから墳端線は不明瞭な状態となっている。しかしながら、墳丘の等高線が正円状を描く特色や現況の東西方向の墳丘の最大径を 43.5 m強までは確認できることから、本来は南北墳丘径と同様に径 44.5 mの正円形であったと復元されよう。したがって、墳丘は丘陵尾根の東西両側の斜面際を墳端として整然たる正円形の設計原理に基づいて築造されたものと考えられる。

墳頂部最高所の等高線は標高 209.5 mであるが、ほぼ中央部に径 6.1 × 7.3 m、深さ 0.3 m前後の浅い凹みがあり、この凹みの側縁辺に沿うように高さ 0.2 ～ 0.3 mの土塁様の高まり（標高 209.77 mの最高点部分）が帯状に認められる。おそらく昭和 29（1954）年の発掘調査後から昭和 54（1979）年の「みよし風土記の丘」開設までの間隙に行われた盗掘の痕跡と考えられ、帯状の高まりは盗掘で掘り出された排出土塊であろう。また、盗掘痕と考えられる凹み内北西寄りには 40 × 52 ㎝、厚さ 15 ㎝の石棺の蓋石状の石材１が存在する。「調査概報」には石材に関する記述は見出せないことから、この石材は盗掘時に周辺域の他のいずれかの古墳の石棺材が持ち込ま

れた可能性が推測されるものの定かではない。

写真３　第 12 号古墳測量調査風景（南西側より）

　墳頂部には、標高 209.25 ｍの等高線の内縁に沿うような状態で 15 × 16 ｍの円形状の大きな平坦状面が認められる。墳頂面では埴輪小片が表採されたことから発掘調査時や盗掘による影響がないとはいえないが調査後は丁寧に埋め戻されたようであり、盗掘も中央部のみであったと推定できることから、本来の広い墳頂面がほぼ保たれているものと思われる。したがって現状でも明瞭に認識できるように、古墳の側面観は典型的な截頭円錐台状の墳丘形を呈しており、古式様相を濃厚に窺わせるものといえよう。なお、昭和 29 年の発掘調査では墳頂部で家形埴輪片が出土しているほか、墳頂の円辺部斜面際で円筒埴輪列が円弧状に並んで検出されている。墳丘端の南北両側には墳丘を尾根から分断して画する背面堀が掘り込まれており、尾根の掘り込み面（堀切の肩）に当たる淡い稜線が認められる。南側の現状の堀幅は墳端までで４ｍ前後、深さ 0.１～ 0.４ｍ程度が確認できるが、西寄りの一部は後世の山道で撹乱されたようであり不明瞭となっている。北側は堀幅６～７ｍ、深さ 0.６～ 0.８ｍと明瞭な掘切痕が認められるが東側は撹乱で崩れて不明瞭となって

写真４　浄楽寺古墳群が群在する丘陵尾根（西側上空より）

いる。北側に位置する第13号古墳の背面堀との間隔は幅0.3～0.6ｍと両墳は近接状態にある。現状の墳丘高は堀内の南側墳端部から4.6ｍ、北側から5.6ｍ、東側から5.8ｍ、西側から約4.8ｍであり、墳丘は二段築成となっている。墳端から段築面までの墳丘傾斜は約20度前後、高さは約１ｍ強で段築面の外縁径は35～36ｍである。段築面は現状で幅1.6～2.5ｍの緩やかな傾斜のテラス状となっており、墳丘の東西両側ではテラス状の段築面が弧帯状に廻る状況（墳丘図内の二本の円弧状破線部）が明瞭に認められる。ただ、墳丘南側と北側の一部は墳丘土の流出で段築面が覆われたようであり不明瞭となっている。特に墳丘の北西側は段築面付近から上方にかけて撹乱状に墳丘土が崩壊・流出した場所があり、墳丘形にやや乱れを生じている。また当該場所付近の墳裾近くでは測量調査中に円筒埴輪片を表採している。昭和29年の発掘調査では、段築の東側テラス面において円筒埴輪列がほぼ１ｍ間隔で並んで検出されていることから、ほぼ全周して廻る可能性が高いと思われる。

段築面より上方の墳丘は傾斜変換点付近の現状径が31～32ｍで約25度と墳丘傾斜角を強めるが、墳丘等高線は墳頂付近までほぼ正円状を描く。墳丘斜面には礫石状の葺石が露出して散在する状態が見られるほか、段築面や墳端付近まで転落した石材も見出せる。「調査概報」にも記されているように、少なくとも段築面より上方の墳丘斜面全面に葺石が敷き詰められているようである。なお、墳丘斜面の南・北・

写真５　第12号古墳遠景（西側谷水田地より）

写真６　第12号古墳近景（南側より）

写真７　第12号古墳近景（北側より）

東側には昭和 29 年の発掘調査で墳丘の土層断面を観察するために設定されたと思われる調査トレンチ痕が幅約１ｍの直線状の淡い凹みとなって見出された。ただ東側トレンチ痕東端寄りの段築面～墳裾部にかけてはトレンチの壁面が崩流したようであり盗掘痕かのごとく撹乱状となっている。（加藤）

４　成果と課題

この度の測量調査の成果は、浄楽寺古墳群で最大墳丘規模墳の基本情報を確認・整理し、資料提供ができたことである。

第 12 号古墳の墳丘・外形についての現段階での基本情報は、次のように整理できる。

①　墳丘規模が直径 44.5 ｍ、高さ５～６ｍの円墳で、二段築成である。

②　墓域を区画する堀切は存在するが、巡らされる周堀はみられない。

③　墳丘斜面には全体に、葺石が密に貼られていると推察できる。

④　段面には埴輪列（円筒が主）があり、巡らされていると推察できる。

⑤　墳頂面は直径約 15 ｍの円形で、縁辺には埴輪列（円筒が主）が巡っているとみられる。

第 12 号古墳の特徴は、県内では最大級規模の大型円墳であり、墳裾を接する状態で群在する、いわば「中期群集墳」[5]（浄楽寺古墳群は 116 基）の中の最高主墳として築造されていることである。この状況と類似しているのが、三良坂町の稲荷山古墳群（68 基）中の最大円墳である稲荷山Ｄ−16 号古墳（直径約 38 ｍ、高さ７ｍ）である（加藤 2011）。群在する古墳群の様相、主墳は大型円墳ということで共通している。両者は県内では他例がなく、特異な様相として把握される。

一方、三次地域（馬洗川中下流域）では、中期の地域首長墓として、造出しを付設した大型の造出し付円墳（帆立貝形古墳とも呼ばれる）少なくとも４基が、継続的に築造されている状況が認められる。円丘部の規模は直径 56 ～ 33 ｍで、糸井大塚古墳（糸井町）のように大型円墳を凌駕する古墳もあるが、首長墳を取り巻く古墳群は「中期群集墳」のあり方ではない（脇坂 2018）。

このような相違は、古墳群造営の背後集団の性格が大きく異なることに起因するといえる。数少ない「中期群集墳」の典型として知られているのが、奈良県の新沢千塚（にいざわせんづか）古墳群（橿原市）である。早くから発掘調査や研究が進められており、渡来系の多彩な遺物など多くの出土資料から、造営集団として百済系渡来氏族（東漢氏など）が有力視されている（森 1970 ほか）。浄楽寺・七ツ塚古墳群も渡来系集団の墓地として把握することができるが、検討資料が十分ではない（脇坂 2011）。課題として述べるように　第 12 号古墳を始め、過去に発掘されている古墳については、再発掘調査を行い、資料の確認が必須である。

浄楽寺古墳群のうち５基が、過去に部分的な発掘調査が行われている。その報告内容は、「２　昭和 29 年の発掘調査」で述べているとおりである。第 12 号古墳については墳丘の全体図と調査区、埴輪列などが記されてはいるが、文章記述にとどまっており、詳しく知る調査区内の実測図・写真などは掲載されていない。また、墳頂部での埋葬主体部は２基の粘土槨とされ、副葬品も出土しているが、これらの検出・出土状況なども詳しくは分からない。調査の記録類や出土遺物は、全て広島大学で保管されているはずであるが、それらの詳細は今日まで公表・報告されていない。

調査から70年近くが経過しているので、大学には当時の関係者は不在で、また、時代の変化により、現在の研究室で過去の資料を報告・研究していくという態勢づくりはむずかしいことと考えられる。こうした時代の変化への対応策としては、大学が保管している過去の調査資料は地元に返却・譲渡し、地元の研究者たちが整理・報告作業を進めることである。

みよし風土記の丘・歴史民俗資料館の大きな使命は、浄楽寺・七ツ塚古墳群の調査研究と保存・公開である。５基の発掘調査関係の資料は資料館で保持・管理し、学芸員を中心に地元研究者などで整理・報告しながら、展示・公開していくことが最も適切な方法である。そして、より確かな資料を得るため、５基については、再発掘・確認調査が行われなければならない。再調査は資料館の主要な年間事業とし、地域の研究者などの協力を得て実施することで、調査経過を見学会や報告会で広く公開していくことができる。さらに、将来的には、５基以外の古墳や七ツ塚古墳群の主要古墳についても、計画的に部分的な発掘調査を継続して行い、研究資料の充実を図ることが望ましい。

浄楽寺・七ツ塚古墳群の成立や実態を解明していくことは、三次地域はいうまでもなく、広島県全体の古代史の動向を明らかにしていくことに繋がっているのである。例えば、三次地域では、古墳群の造営集団が導入した外来先進文化を基礎として、百済系最新技術が顕著な寺町廃寺（三谷寺）が白鳳期に造立されたと想定できる（三次市教育委員会 2022）。また、県内全体の古墳文化の形成状況を把握していくと、県内最大の前方後円墳・三ツ城古墳が、やや内陸の西条盆地に造営されているが、この背景に、三次地域に拠点を置く「中期群集墳」や大型造出し付き円墳の存在が、深く関わっていたことが推察されてくるのである。

このように、浄楽寺・七ツ塚古墳群は、広島県の古代史解明にあたり重要な位置にあることが確かである。今回の測量報告を新たな資料として加え、特に、三次地域の古代史をより明らかにしていくことを課題とし、研究や情報提供に努めていきたい。（脇坂）

註

(1) 江戸時代編纂の『藝藩通志』（国書刊行会 1981『藝藩通志』第４巻）の絵図には、古墳群近くに「浄楽寺（じょうらくじ）」跡の記載があり、現在も古墳群が存在する丘陵地の小字名とされており同名の小堂も丘陵下西側へ存在する。したがって、この小字名を古墳群名とするものであるが、古墳群の調査報告時に使用漢字を誤って「常楽寺（じょうらくじ）」古墳群として報告されたようである。

(2) 考古学研究会編 1954『私たちの考古学』１でも、木下忠氏が「広島通信」で三次尚史会が発見した「清見寺（きよみでら）古墳群（丘陵北端にある浄見寺（きよみでら）の名称を誤って付したと思われる）」（150 基…七つ塚古墳群も含めた数か？）の調査として報告している。そこでは広島県教育委員会の企画で三次尚史会や広島大学の協力によって、調査委員長に広島大学の小倉教授、調査主任を松崎助教授として３月 26 日から 10 日間程実施したとある。

(3) 昭和 26（1951）年に鵜殿治雄・河野寿・滝谷章・橋本富士雄・三浦亮・吉岡敏夫氏らによって三次の歴史・民俗・自然等の調査研究を目的に結成された在野の研究同好会。

(4)「常楽寺古墳群発掘調査概報」と同じ内容は、「常楽寺古墳群調査報告」として双三郡・三次市史刊行会 1956『広島県双三郡三次市史料総覧』第１篇に収録されている。

(5)「群集墳」は後期（横穴式石室群）の様相をいうのが一般的であるが、中期の群在する古墳のあり方を後期と区別して、「中期群集墳」の表現を使用した。

引用・参考文献

植田千佳穂 2003「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第４集

植田千佳穂 2005「史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群測量調査報告Ⅱ」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第５集

加藤光臣 2011「稲荷山Ｄ -16 号古墳の測量報告」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第８集

加藤光臣 2018「岩脇古墳群測量調査報告」『岩脇遺跡発掘調査・岩脇古墳群測量調査報告書』三次市教育委員会

松崎寿和・潮見浩 1956「常楽寺古墳群調査報告」『広島県双三郡三次市史料総覧』第１篇 双三郡三次市史刊行会

三次市教育委員会 2022『史跡 寺町廃寺跡―推定三谷寺跡第１～８次発掘調査総括報告書―』

森　浩一 1970『古墳』（保育社）他

脇坂光彦 2018「いわゆる帆立貝形古墳の造営」『境目・広島県の古墳文化』

脇坂光彦 2019「浄楽寺・七ツ塚古墳群は渡来系集団の墓」『芸備』第 51 集

（かとう　みつおみ　三次地方史研究会・わきさか　みつひこ　芸備友の会）